

天皇陛下御即位記念 「企画展」及び「市内文化施設無料開放」について

1. パネル企画展「亀ヶ森の先人～皇后陛下ゆかりの先人たち～」を開催します

花巻市総合文化財センターでは、パネル企画展「亀ヶ森の先人～皇后陛下ゆかりの先人たち～」を開催します。この企画展は、本年5月1日の皇太子殿下の天皇陛下御即位に当たり、皇后陛下になられる皇太子妃殿下の母方家が、花巻市大迫町亀ヶ森にゆかりのある先人に繋がっていることから、その関係をパネルにより紹介するものです。

【開催期間】 5月1日(水)から6月9日(日)まで

【開催時間】 午前9時から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

【開催場所】 花巻市総合文化財センター(花巻市大迫町大迫3-39-1 電話29-4567)

【入館料】 大人200円、小中高生100円(花巻市内の小中高生は無料)

ただし、5月1日(水)は無料開放します

【紹介する先人】

〈山屋他人(やまや たにん)〉慶応2(1866)年～昭和15年
海軍大将、横須賀鎮守府長官(皇后陛下母方曾祖父)

〈菊池金吾(きくち きんご)〉文化9(1812)年～明治26(1893)年
盛岡藩勘定奉行。盛岡一の富豪(山屋他人母方の大叔父)。

〈野辺地尚義(のへじ たかよし)〉文政8(1825)年～明治42(1909)年
日本女子英語教育の祖。東京芝・紅葉館主人(山屋他人母方の伯父)。

詳細は別添チラシをご覧ください。

2. 市内文化施設11施設を無料開放します

1 期 日 平成31年5月1日(水)[国民の祝日]

2 対象施設

- ・花巻市博物館
- ・宮沢賢治記念館
- ・宮沢賢治童話村(賢治の学校)
- ・花巻新渡戸記念館
- ・萬鉄五郎記念美術館
- ・高村光太郎記念館
- ・花巻市総合文化財センター
- ・石鳥谷農業伝承館
- ・石鳥谷歴史民俗資料館
- ・大迫郷土文化保存伝習館
- ・南部杜氏伝承館

<パネル企画展>

亀ヶ森の先人

～皇后陛下ゆかりの先人たち～



海軍大将・山屋他人



紅葉館主人・野辺地尚義



実業家・菊池金吾

(写真:盛岡市先人記念館自)

期間:令和元年5月1日(水)～6月9日(日)

開館時間:午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

入館料:大人200円
小中高生100円
(花巻市内の小中高生無料)

盛岡市立杜陵老人福祉センター
「賜松園」(旧菊池金吾邸跡)

同時開催:「山博-SANPAKU-コレクション～山への想い～」展

花巻市総合文化財センター

岩手県花巻市大迫町大迫3-39-1

TEL:0198-29-4567

(国道396号大迫バイパスより入る)



菊池金吾

(1812~1893)



菊池金吾は、文化9年(1812)亀ヶ森・菊池弥兵衛家(屋号・川原田)の三男として生まれた。金吾は幼い頃から才気煥発で、やや粗暴な面もある子だったらしく、両親もかなり手を焼いたと

いう。菊池家が盛岡藩家老・藤枝宮内の給所肝入となっていた縁で、金吾は15歳の時に加判役・花輪栄(後に家老)に仕え、江戸に出てその才能を磨く契機となった。

金吾は、江戸勤めから戻ると、盛岡藩士・大石家に婿養子に入り、大石金吾と名乗り士族となった。藩士に列すると、直ちに自らの殖財の才能を開花させた。当時、財政難で困窮していた藩の財政担当として藩主利済の信を得て、天保11年(1840)に日詰蔵奉行、同13年には福岡蔵奉行となり、同年勝手方に昇進し江戸勤番となった。そして、ついに弘化元年(1844)勘定奉行まで出世。その後、嘉永5年(1852)に百石を給せられたことから、大石家を出て菊池姓に復した。

嘉永6年(1853)三閉伊一揆の仙台領への越訴によって藩の権威が失墜すると、院政を敷いていた利済もついに失脚した。利済派とみなされた金吾も、江戸藩邸において役儀を免ぜられ、帰国して蟄居を命ぜられた。43歳の時であった。

金吾は、蟄居期間も殖財の道を講じて財を蓄え、明治維新後に解かれると、一躍盛岡一の富豪と呼ばれるまでになっていた。そして、旧恩ある花輪栄の屋敷を、花輪が一生困らないほどの金額で購入し、餌差小路(現盛岡市肴町)一帯に広大な屋敷を構えた。

金吾のすばらしさは、その財産を惜しげもなく投げ、県内の機織業の先駆者として士族の殖産の法をたてたり、たびたび窮民救済のために私財を投げ打ったりしたことである。そのため、篤志家・慈善事業家という評価も得ることになる。

明治9年(1876)と14年(1881)の明治天皇のご巡幸に際しては、2度とも天皇の行在所として自宅屋敷を提供している。とくに、天皇は金吾邸の庭にあった古松をいたく気に入り、「見馴れの松」という名を賜ったという。明治14年のご巡幸に際しては、古松を残して庭を全面改修したが、その際に以前からあった鉄灯籠を整理して実家の菊池家に寄贈したが、現在亀ヶ森愛宕神社境内にある市指定有形文化財の鉄灯籠である。

「見馴れの松」は、明治17年(1884)11月の盛岡大火で焼失。それを知った天皇は、明治19年(1886)金吾に3本の松の木を下賜した。金吾は感激し、その松を植えた新たな庭を整備して「賜松園」と名付けた。賜松園は、現在盛岡市保護庭園となって市立杜陵老人福祉センターの庭として市民に愛されている。また、天皇の御成の間となった建物は解体されて、盛岡市中央公民館中庭に移築され「聖風閣」という名でお茶会などに利用されている。

参考：入内島一崇『遠野菊池党』(2005)

大迫町『大迫町史資料』第一集(1973)ほか

山屋他人

(1866~1940)



山屋他人は、慶応2年(1866)盛岡藩士・山屋勝寿、ヤスの長男として盛岡城下の餌差小路長屋に生まれた。山屋家は、中世に稗貫郡を領有していた稗貫氏の支族で、亀ヶ森城主であった亀ヶ森氏を祖としている。稗貫氏没落後、亀ヶ森氏一族は南部氏に仕え、そのうち亀ヶ森能登嘉明は九戸郡山屋村に所領を得たことで山屋姓を名乗った。

山屋家は明治期までに五家に分かれ、百石以上が二家、五十石以上が二家あったが、他人が生まれた山屋勝寿家は、二人扶持という最下級武士であったことから生活は貧窮していた。貧乏であったが故に、妻ヤス(旧姓野辺地)の叔父で勘定奉行までのぼり詰めた菊池金吾(当時は蟄居中)を頼って、金吾の屋敷(餌差小路)近くの長屋を借りていたのではないかとされている。しかし、金吾が餌差小路の花輪邸を購入したのは明治維新後とされているので、今後の詳しい資料調査が必要である。

貧乏な山屋家ではあったが、母のヤスは大変に教育熱心な人であり、他人は明治5年(1872)7歳で加賀野にあった漢学塾に入塾。翌年、盛岡学校が開校するとそこに入学し、のちに猪川塾でも漢学を学んだ。明治12年(1879)盛岡学校を卒業すると、東京で民間社交場・紅葉館建設に携わっていた伯父(ヤスの兄)の野辺地尚義を頼って上京。海軍兵学校の予備的な存在である攻玉社に入学。明治15年(1882)に念願の海軍兵学校に入った。

明治19年(1886)海軍兵学校を卒業。明治27年海軍大尉として仮装巡洋艦「西京丸」の航海長で日清戦争に従軍。明治29年(1896)海軍大学校教官となり、私生活では丹羽貞子と結婚している。海軍大学校の在任中には海軍創設以来の独創的な海戦術と言われた「円戦術」を考案し、学生たちに講義をした。明治37年(1904)海軍大佐で日露戦争に従軍。日本海海戦に参加し、当時最強といわれたロシアのバルチック艦隊を撃破した。この時に日本海軍が採用した秋山真之の「丁字戦法」は、山屋が考案した円戦術と似ていたため、その基は山屋の円戦術であるとする人もいる。

明治38年(1905)戦艦「笠置」艦長。明治44年(1911)海軍大学校校長。大正2年(1913)海軍中将兼海軍大学校校長。大正3年(1914)第一次世界大戦に第一艦隊司令官として従軍。大正8年(1919)海軍大将。第一艦隊司令長官。大正9年(1920)第一艦隊司令長官兼連合艦隊司令長官、その後横須賀鎮守府司令長官となる。大正11年(1922)には軍事参議官。大正12年(1923)予備役となった。

昭和11年(1936)五女寿々子が、海軍兵学校で同期の江頭安太郎の息子・江頭豊(日本興業銀行勤務)と結婚。この年退役。昭和15年(1940)9月10日、75歳で逝去。葬儀委員長は前内閣総理大臣の米内光政(盛岡市出身)であった。

野 辺 地 尚 義

(1825~1909)



野辺地尚義は文政8年(1825)、盛岡藩士・野辺地三弥の長男として父の実家である稗貫郡亀ヶ森村の菊池家(屋号川原田)に生まれた。菊池家は、盛岡藩家老・藤枝宮内の給所肝入をつとめる家柄であり、尚義の父・三弥は幼い頃から優秀であったため、盛岡藩士の野辺地家に養子に入り、のちに大迫通代官まで勤めた。

尚義は、父の跡を継いで盛岡藩士となり、22歳の時に江戸詰となった。しかし、盛岡に戻った後、時流を感じて安政3年(1856)に脱藩。江戸に出て蘭学者で兵学者でもあった大村益次郎の鳩居堂で学んだ。この間、勝安房(勝海舟)や大鳥圭介らと交遊し、その後長崎に出て英語を学んでいる。長崎遊学後は、長州藩の毛利家江戸屋敷に出入りし、伊藤博文ら長州藩士に蘭学や英語を教えたという。その後、尚義は世界情勢を説くために盛岡藩に戻るが、佐幕(親幕府)へと向かっていた藩に意見は入れられず、逆に江戸藩邸で脱藩の罪で捕らえられ死罪を申し渡された。まもなく死罪は取り止めとなったが、それは師の大村益次郎の計らいによるものであった。

明治5年(1872)、京都に移り住んでいた尚義は、その語学力が認められ、京都府が創設した我が国初の女学校である新英学校及女紅場(のちの京都第一高等女学校)の初代校長として迎えられた。この学校は外国人から英語を学び身につける英学生と、料理・裁縫を習う女紅生とに分かれていて、当時の女性のエリート校であった。この学校の舎監には、のちに新島襄と結婚する山本八重(新島八重)もいた。

明治14年(1881)、開国により東京では多くの商談や会議が行われるようになり、東京芝に民営の和風高級社交場「紅葉館」が建設されることになった。上流階級の人々が集う社交場では、礼儀作法のしっかりした教養の高い女給さんが求められたことから、京都の女学校での実績を買われた尚義が、初代館主として招かれた。

紅葉館の2年後に開館した官営社交場「鹿鳴館」はわずか6年で閉館になるが、紅葉館は昭和20年(1945)まで営業し、新渡戸稲造の帰国報告会や横山大観らが創設した日本美術院の発表式場として、政治・文化史上の重要な舞台となった。

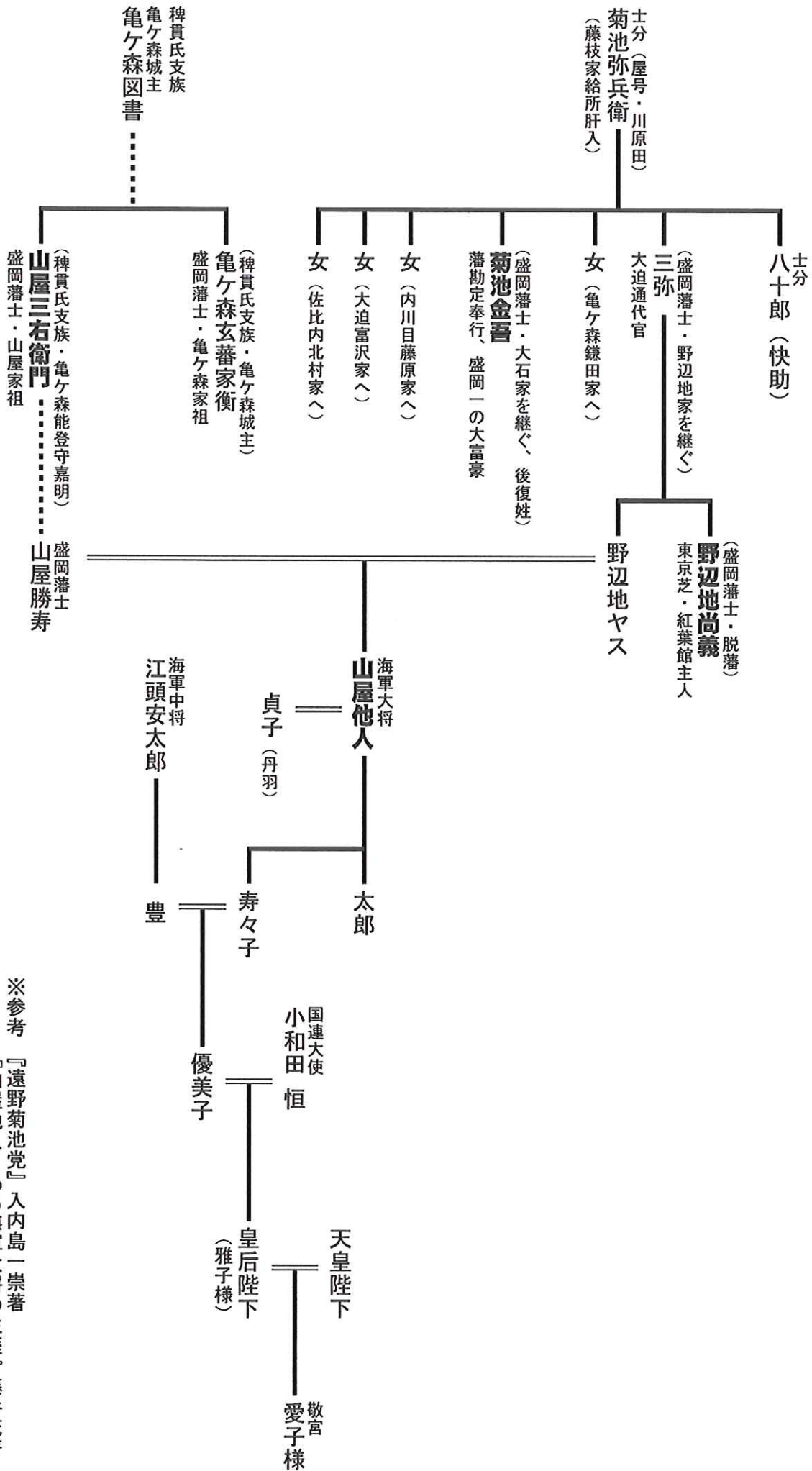
作家の尾崎紅葉は、自分の名を紅葉館からとるほど通い詰めており、紅葉館の美人女給「お須磨」を巡って、学生の巖谷小波と、大金持ちの大橋新太郎とが恋のさや当てを演じた話をモデルに『金色夜叉』を書いた逸話なども有名である。

尚義は、紅葉館館主を29年間務め、明治42年(1909)東京芝の自宅で逝去。85歳。墓は東京青山墓地にあるが、遺言により生家の亀ヶ森菊池家墓所にも建立されており、菊池家の過去帳にその名が残っている。

紅葉館は、昭和20年(1945)東京大空襲で焼失。跡地には東京タワーが建っている。

皇后陛下母方系図

(黒太字がパネル紹介の人物)



※参考

『遠野菊池党』入内島一崇著
『山屋他人 ある海軍大将の生涯』藤井茂著